

Title	無産階級独裁とソエト制度
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1345(133)- 1352(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0133">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0133</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稱する犠牲に廻り得るなり」と述べしよりして、彼は Clark 教授は生産力説を採れるにも拘らず尙ほ「Abstinence Theory」として知らるゝ利子説明の方法に與するの傾向あり」とて非難するに至れり。彼は語を次いで曰く「勿論彼は、abstinence を經濟的美點と考へ若しくは其理由に基きて利子を是認するを必要と考へざることは、明かに述べ居るなり。又生産物を造り出す資本の力が利子の基礎なることに重きを置けるなり。然るに彼は abstinence は新資本の創造にのみ關係するものにして、全く動的現象なるを信せる旨を極めて明瞭に述べたり。而して彼の資本理論は節慾なき靜的狀態に關して發展せしめられたるを以て、總て之等の事は、Clark 教授が、靜的現象としての利子の理論的説明を、節慾の動的現象の上に基かしめざることを示すものと思はるゝなり。然るに生産物の一部分を

節慾と稱する犠牲に歸し、又 Giddings 教授の或説明を賛成して引用せる章句によりて、Clark 教授の見解は余には一層不明瞭となれるに至れり。Giddings 教授は資本の生産費を節慾の中に求めんとせず、併し後の疲勞せる勞働時間の増加せる倦怠の中に求めんとするが如く思はるゝなり。其れ故余は二つの一般的論評を下すを以て満足せんと欲す。

(一) 節慾説は或前提に基くものにして Clark 教授の生産力説と撞着なからしめらるゝを得ざる或結果を導くものなり。  
(二) 節慾説其ものは利子の意義の探究者の通過せざる可らざる危険なる狹路を有するものなり。(Böhm-Bawerk, op. cit. pp. 275-277) 而して彼の意見に従へば、Clark は其點に於て彼の根本思想との連鎖を失へるものなりと。兎も角 Böhm-Bawerk は Clark の利子の生産

力説を排斥せることは前述の如し。其は亦 Böhm-Bawerk が G. Walker の駁論に答へし句の中に殊に明かなり。即 G. Walker の非難は、彼の數多の原因の一に過ぎざる且最も重要なものには非る事實を、彼の利子學説の唯一の且主要なる原因として強ふるものにして、「Walker が資本の生産力は利子の起源に何等影響を及ぼさずと云ふ意見を余に歸するは誤りなり。寧ろ余に歸すべきは資本の生産力を其れ自身利子の十分なる原因として認めずと云ふことなり」と言へり。

されば、生産物を創造する資本の力が利子の基礎なりと確信せる Clark とは、論争を惹起するは宜なりと言はざるを得ず。而して彼等の利子論争は彼等の資本に關する見解の一致を見ざる間は永遠に解決の道に就かずして、後進の幾多の利子研究者をして再思參考而も尙ほ汲みて盡きざる興味の泉源として残らんのみ。(完)

## 新刊紹介

「無産階級獨裁とソビエト制度」

Karl Diehl, Die Diktatur des Proletariats und das Rätesystem, Jena 1920.

勞農露西亞政府の代表者は、ボルシエビズムがマルクス主義の最も正しき適用なることを主張し、殊にレーニンの著作が甚だ多くの紙幅をマルクス言説引用の爲めに割いて居る事は、既に人の知るところである。而して獨り「共產黨宣言」(一八四八年)及び其時代の他の著作のみならず、其後殆ど二十年を経て、マルクスの *Sturm und Drang* 時代は既に遙かに過ぎたと思はれる一八七五年に於ても、彼が猶ほ「資本主義社會と共產主義社會との間には、一より他への革命的變形の時期が横はる。これに適應するものは又

この政治的過渡期で、此期の國家は無産階級の革命的獨裁に外ならざるものである」と明記して居る事を顧れば、(Kritik des Gothaer Programms) レニン等の主張は決して無根據の立言とは見ることが出来ない。併し乍らマルクス、エングルスが、其主要なる著作中に説くところを窺へば、資本主義は其發達の頂點に對して崩壊するもので、次に來るべき社會組織の準備は資本主義の社會の内部に於て整へられる。約言すれば、資本主義の完成爛熟が、社會主義又は共產主義實現の前提要件であるとの思想は、彼等が常に反覆力説して已まざるところである。而して「經濟學批評」序文中「一社會形態はその枠内に包容し得る一切の生産力が發達し盡さるる以前に滅ぶる事なく、新しきより高度の生産關係は、その物的生存條件が舊社會の胎内に於て完成(直譯すれば孵化)するより以前に、之に取て代ることなし」との一節は、最簡潔に此思想を表明するものである。此思想は政權略取に依て一舉に現在社會組織を變革せんとする、バブソフ若

つてマルクスの矛盾を指摘するか、或は二者の中の何れかを取り他を棄て、マルクシズムの精髓の其處に存することを論證するか、何れか一途に出でなくてはなるまいと思はれる。今茲に紹介するザイルの新著は、此問題の解答に光りを投ずるものである。本書はもとフライブルグ大學々長交代式に於ける講演に胚胎し、それを大に擴張したもので、「ボルシエ非ズムと無産階級獨裁」「マルクシズムの無産階級獨裁に對する態度」「獨逸社會民主主義諸黨の無産階級獨裁及びソ非エト制度に對する態度」「サンデカリスト及び無政府主義の無産階級獨裁並にソ非エト制度問題に對する態度」「無産階級獨裁と第三インターナショナル創立」「無産階級獨裁及びソ非エト制度の實行に關する批評的結論」の六章を内容として居るが、評者の最も興味を感じたのは、そのマルクシズムとボルシエ非ズムとの關係を論じた諸節である。

著者の見るところに従へば、ボルシエ非キが主張して居るやうな無産者獨裁とソ非エト制度

しくはプランキイ一流の革命陰謀的社會主義と全く相容れざるもので、マルクスの社會進化學説は此種の妄想を一掃することに依て、近世社會主義に甚だ實相主義的色調を強める大功績を立てたものと吾々は考へて居る。今此一事を念頭に置いて目前の時事問題に臨めば、資本主義が何時其發達の頂點に到達するものか、其事實を識別することは甚だ困難であらうと思はれるが、兎に角歐洲諸大國の中にあつては、英、獨、佛等に比較して、露西亞が最も其頂點から遠ざかつて居るものである事だけは全然疑を介む餘地がない。然るに今露西亞に於て「無産階級の獨裁」(或は反對者の好んで惡評する「ボルシエ非キの獨裁」)に依て、彼の比較的幼稚なる工業と、彼の智能、團結、組織の程度低き露西亞の勞働者と農民とを以てして、若し一舉に共產主義が實現永續し得るものとすれば、マルクスの社會進化論は甚だ價値の小なるものと謂はなければならぬ。其處で人はマルクシズムには上述の如き二の相容れざるものが含まれて居ると謂

とは決して純粹のマルクシズムと何等の關係のないものである。レニン、トロツキイ、ブヒャリン其他、ボルシエ非ズムの首領等は、屢々自らマルクス主義の要求を執行する者に外ならざる事を力説して居るが、それは誤謬である。彼等はマルクスの述作から、或る外面的のモットオと要求とを取つて自家のものとなしたが、それに、マルクス主義の眞意義とは決して一致しないやうな解釋を下したのである。就中マルクス學説の根本をなす進化思想を全然否認する點に於て、二者の反對が決定的に現はれて居る。無産者の獨裁とソ非エト制度とに依て、一撃を以て政治的並に經濟的生活を全然改造しようとする事に依て、彼等はマルクスが常に反覆言明した、勞働者階級の支配權獲得は、プロレタリアの高度なる精神的經濟的的政治的成熟を俟つて始めて行はれ得るとの警戒訓言を無視して居る。此支配權が獲得せられた場合にも、兎に角無産者獨裁と云ふ事があるとしても、それはたゞ短期間の例外状態に關すること、而かも其場合にも一

切の事はデモクラシーの諸形態に於て動かなければならぬのである。故にボルシェビキの戦略と政策とは、既にマルクスが共産黨宣言に於て否認するところのブルンキイ流の運動方法と、革命的暴力行為に依て、突然一新社會を造り出し得との妄想への復歸を意味する。彼等はバブフとブランキに復歸し、而して其特有なる露西亞色彩に於て、バクウニンとヘルツェンを指すものである云々(S. 83)。マルクス、エンゲルスの見解に従へば、經濟生活上に於ける生産力が、技術の進歩に由て人間の意欲とは無關係に發達し、其結果として必然的に新しい社會が成立する。斯くして機械的技術に基づく大工業、私有財産を基礎とする資本的舊社會は、宛かも生産力の技術的發達の爲めに、奴隸制度及び封建制度が破裂させられたと同じやうに崩壊する。資本的社會は私有者が、生産力發達の或階級に於て、最早此巨大なる力を指導制御する事が出来なくなるので其存在を失ふのである。必然的に生ずる、より高等なる、即ち生産が全人

民團體によつて指導せらるゝ社會形態は、生産力が舊法制と衝突する程度に發達すれば、是非共來らざるを得ないのである。即ち「革命に由らず、進化によつて新社會は齎らされる」。此進化的社會觀と、革命的戰略とは相結合し得ない事はない。併し乍ら「革命的行為は新社會建設の豫備條件が存在するときのみ意味と効果を有する」のである。即ち「一般に革命をして成功の見込あらしめる第一の最重要なる根本條件は、マルクスに従へば、一層適當なるより高き社會制度を以て之に代らしめなければならぬ程度に發達した資本主義形態である。」即ちマルクスに従へば、此變革は先づ英吉利佛蘭西獨逸の如き諸國に於て行はるべきもので、決して農民が人口の大部分を占め、資本主義即ち工業の發達は、總に其發端にある露西亞の如き國に於て企てらるべきものではない。成程マルクスは共産黨宣言に於て革命的タクチクに重きを置いて居る。併し乍ら此時代はマルクス生涯の第一期の特徵たる、革命的的精神横溢の時代であつたと同

時に、一八四七—一八八八年には一般に大革命の破裂が豫期せられて居つた。加ふるに當時重なる文明國に於ては普通選舉權は未だ獲得せられて居なかつたので、斯る形勢に於ては、議會運動なる適法なる方法に依て、労働者が政權を取得することは全然不可能であつた事を考へなければならぬ。然るに一八五〇、六〇、七〇年代に於てマルクスの思想の進歩と其闡し得たる經驗、殊に憲章黨運動二月革命巴里コンミュウンの經過は、漸く彼をして其經濟的進化論なる根本思想に重を置いて、革命的暴力行為に對し疑を抱く事を漸く多からしめるに至つたのである。(S. 35, 36)即ちデイルは、一八七二年出版「共産黨宣言」の新版の序文に於て、マルクス、エンゲルスが、革命的タクチクの既に時勢に遅れたる事を言明したりと指摘し(S. 40)更に「奇襲の時代、即ち無自覺の民衆の先頭に立つ、少數者に依て遂行せらるゝ革命の時代は既に過ぎた。……拉丁諸國に於ても人は漸く、舊戰略の漸次に改められねばならぬ事を悟つて居る。宣傳と議會活動と

の徐々たる仕事、此處でも黨の第一の任務と認められて居る。此の(黨の)成長を間斷なく持續せしめ、遂に現在の政府形態以上に成長するに至らしめる事、これが吾人の主なる任務である。而して獨逸に於ける社會的戰鬥力の絶えざる膨脹を一時阻害し、或は暫らくは退歩をもなさせしめ得べき手段は僅かに一つある。軍隊の大規模なる衝突がそれである……吾々「革命主義者」「革命家」たる吾々は、不法手段及び革命よりも適法手段を取る場合に於てよりよく發展する」(Marx, Über die Klassenkämpfe in Frankreich 1895, Vorrede)と云ふエンゲルスの句等を引用するのである。(S. 401)

然らば、マルクスが明言して居る無産者獨裁の説に對して、デイルは何と云ふかと云ふに、彼は此要求を餘程軽く見て居る。第一に無産者獨裁なる言葉はマルクス、エンゲルスの全著作を通じて僅に五六ヶ所にしか用ゐられて居ない。而かもそれが多くは書簡か小論説に於て用ゐられて居るので、彼等の主要著作に於ては

ない。而してその生産者獨裁も、決してボルシエ非キの解する如く、デモクラシイの原則と相對立するものとしては説かれて居なす (S. 44) と云ふのである。本文の始めに引用したゴオタ綱領批評の一節の如きは、マルクスがそれに依て何を云はうとしたかを見るに、彼はラツサアルの國家社會主義思想に反對して、「國家」は常に當時行はる、階級關係に適合するものであるから、社會主義に到達する爲めには、完全なる國家改造が行はれなければならぬ。而して民主的共和國に於ても、變化せる經濟關係に適應して政治的改造が遂行せられる爲めには、政治上の過渡期が來なければならぬ事を主張したのである。而して、此の過渡期の爲めに無産者獨裁を要求したのである。併し乍ら此無産者獨裁は原則上デモクラシイと相反する政府形態ではなくて、短い一時的例外状態に外ならぬ。決してボルシエ非キの考へるやうな、幾代幾十年繼續すべきものではないのである。何れにしても、マルクスの所謂無産者獨裁が、ボルシエ非キの思

が既に示したる如く、無産者獨裁の爲めの特有なる形態である」と云はれて居るのである。

(S. 467)

以上はボルシエ非キとマルクシズムとの關係であるが、さてマルクス思想の正しき解釋であるや否やを問はず、實行上に於てボルシエ非キは果して如何なる成績を擧げて居るかと云ふに、デイルは「ボルシエ非キの全政策は失敗に終り……ボルシエ非キが露西亞の政治と國民經濟との改造に繋げた、殆ど有ゆる大なる希望と豫期とは果たされて居らぬ」(S. 86) 「外面的政治的、純憲法的改造は事實上行はれ、且つ今日まで維持せられて居るが、經濟的改造は全然失敗して、資本的舊經濟制度への完全なる復歸に導いた」(S. 80) と謂ふのである。彼は農工業上の生産力著しく減退したる事、政府が報酬平等の原則を放棄して特別なる高給を以て専門家を招聘するの已むなきに至つた事、大地主の手より奪はれた土地が共有物とはならずして農民の私有地となつた事實等を擧げて居る。是等の

想と原則的に違ふところは、マルクスの場合には、それがブルジョワジイが支配權を失つた既成の事實を現はすに過ぎぬもので、決してブルジョワジイを強制的に倒す手段たるべきものではないと云ふ點に在る。蓋し唯物史觀に従へば、ブルジョワジイは、一の統一的無産者階級が必要なる經濟的權力を既に掌握し、他方に於てブルジョワジイ階級が高度に發達せる生産力を最早制御すること能はざるに至つて、始めて支配權を失ふものだからである。(S. 46)

マルクス、エンゲルスの意見に従へば、無産者獨裁は反デモクラチツクの意味でなく、デモクチツクの政體の枠内に於て行はるべきものであると云ふに關し、猶ほ何等かの疑が存するならばと云つて、デイルは一八九一年獨逸社會民主黨綱領案に對するエンゲルスの批評の一節を引用する。それには「若し何物か、確實であるとするならば、それは吾黨並に勞働者階級は、民主的共和國の形の下に於てのみ支配權を掌握し得るとの一事である。加之それが、佛蘭西大革命

事實は固より吾々が今始めて聞くところではないが、たゞデイルが嚴に出處疑はしき報導を避け、一二局外者の文書を除くの外悉くレヘニン、トロツキイ其他勞農政府當局者の言明を材料として、其を判斷の基礎として居る一點は、學者當然の用意と云ひ乍ら、また讀者の尊重すべきところであらう。

デイルが勞農政府治下に於て、反對黨の權利自由が無視せられつゝある事を非難するが如き、稍々戰場に於て國際法を説くに等しき迂遠を別とすれば、資本主義の發達未だ幼稚なる露西亞の如き主農國に於て、一舉に社會主義を實現するの不可能なるべき事に就ては彼れの所説は評者の首肯するところである。經濟的豫備條件未だ備はらざるところに於て、一舉に暴力に依て一新社會を造出することが可能ならば、同じく暴力に依て一舉に一時代前の社會制度(現在に就て云へば封建制度)を復活せしむることが出來なくてはならぬ筈である。併し乍ら諸種の報導を綜合すれば、現露西亞政府の當局者には

誠實才能膽略に於て、舊政府當局者に勝るものが多いと云ふのは恐らく事實であらう。果して然りとすれば、レニン等が必要已む事を得ず、其の最初に標榜するところを修正若くは放棄して、漸次資本主義的制度に復歸しつゝあると云ふ報導が事實であつても、而してそれを事實と信すべき理由は充分ある。其は必しも露西亞人の爲め不幸とは云はれぬであらう。本書の論斷に對しては固より異論を抱く者はあるべき筈であるが、學說史的博渉と記述の正確とは著者平生の長技であるから、此一點は充分信頼することが出来る。而して本書中に引用するもの以外、更に遡つてボルシエ非ズムを研究せんと欲するもの爲めには Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie Bd. XI. は、其三百四十四頁に獨逸語の重なる文献を列記して居る。

本書は辛うじて百頁を超える小冊で、固より近時に於て特に注目を要する著作と云ふべきものではない。以上稍々長きに亘つて之を紹介し

のは包含せず、(二頁)是等を一括して法則科學(Gesetzeswissenschaft)と名付け、歴史科學(Geschichtswissenschaft)に對立せしむ。而して又こゝに歴史的自然科学(historische Naturwissenschaft)なるもの存し、(例へば地震、噴火等の記録に基づくもの)自然科学と歴史科學との中間に介在す。(一〇頁)然らば法則科學と歴史科學とは如何なる點に於いて相違するか。其の區別は唯法則科學が個々の要素を孤立し、其の性質に従つてのみ觀察するに、歴史的研究はある結合が一定の場所一定の時に形成されることを確立するに向はんとする點にあり。(一四頁)是等の點に關する議論は未だリッケルトの峻嚴なるに如かず。更に氏は歴史科學及び法則科學を觀察するに當つて必要なる方法の研究、例へば言語の研究の如きを名付けて「原則科學」(Prinzipien-wissenschaft)と云へり。是に就いては尙ほ後に述ぶる必要あれば、こゝには省略す。

吾人は暫く眼を轉じて氏の人生觀を一瞥するの要あり。氏に従へば人類の精神と肉體とは相

たのは其の取扱ふところの問題の重要なが爲めである。(小泉信三)

Herman Paul:—Aufgabe und Methode der Geschichtswissenschaften. 1920

「言語史原理」Prinzipien der Sprachgeschichte.」の著者として斯界の權威たるパウルの方法論はよし僅々菊版六十頁に足らざる小冊子なるにもせよ、尙ほ吾人文化科學研究者にとつて一讀の價值あるものと信す。勿論其の方法論なるや著者の専門たる言語學を偏重するの傾ありと雖も、又吾人に益を與ふること少しとせず。故に以下其の大意を述べて是を紹介し、大方の一讀を奨めんと欲す。

パウルは其の科學を分類するに當つて、自然科学(Naturwissenschaft)なる語は唯物質の科學(Wissenschaft von der Materie)にのみ限り、心理學の如き精神的狀態及び行爲を對象とするも

離れて存するものにあらす。精神は肉體に作用し、肉體は精神に影響す。今吾人の行動(Bewegung)を考察するに感官的刺激に基く反射運動あり。そは全然吾人の勝手氣儘にならざるものなれど、是に對して他に吾人の自由になるもの存す。即ち吾人の意思に依つて肉體の行動を支配せんとするものにして、そは練習(Übung)に依りて獲得せらるゝものなり。然れども人類の行動には更に他のもの存せり。吾人はある目的に到達せんが爲めに、其の手段たる道具を作る。即ち人類はある完全なる道具を作らんが爲めに、自然的對象物に向つて働くことが先づ最も近き目的にして、道具の生産及び斯くの如き道具の補助に依つてなされる生産が更に又道具を生ずるに至る。(一八頁)此の意味に於いて鐵道も道路もすべて一の道具に過ぎず。而して其の見地が深く廣くなるに従ひ、其の目的に役立てんとする行動は益々高からざるを得ず。然らば人間と人間との交渉は如何。勿論人類の進化は是等の交互作用を待つて始めて生ずるも